

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

～開拓魂で未来を拓く挑戦者たち～

受賞者 **大野地区公民館**

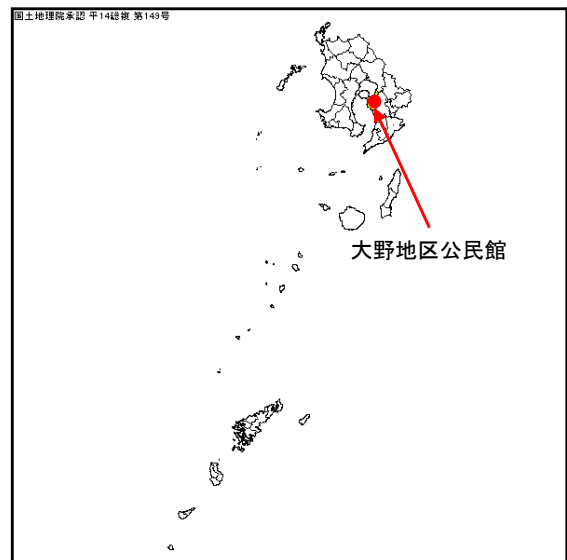
か しまけんたるみず し
(鹿児島県垂水市)

■ 地域の沿革と概要

鹿児島県大隅半島の北西部、鹿児島湾に面する垂水市は、鹿児島市と大隅半島を結ぶ海上陸上の要所であり、年間平均気温20度、晴れの日が年間200日以上あるなど、温暖な気候を生かしたインゲン、キヌサヤエンドウ等の野菜類やびわ・柑橘類の栽培が盛んな地域である。

垂水市に隣接する桜島火山は、平成18年に58年ぶりに昭和火口が噴火し、平成27年には、一時的ではあるが噴火警報レベル4（避難勧告）に引き上げられるなど、近年、火山活動が活発化する傾向にあり、降灰による農作物被害や日常生活での降灰除去など住民の負担は大きくなっている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

大野地区は垂水市街地から東北東へ約13km、高隈山系の中腹、標高550mの中山間部に位置し、夏は冷涼、冬は寒冷な気候で、特に冬場は北西からの強風で気温も低く、10cm程度の積雪が見られる日もあり、春から梅雨にかけては雨や霧が多い地域である。これらの気象条件を生かして茶や豆類、高原野菜の栽培に加え、地区内の9割以上を占める森林資源を活用した林業も盛んであり、第一次産業である農林業が基盤となっている地域である。

人口約130人、住民の約半数が65才

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的集団
農 家 率 (内訳)	51.7%
	総世帯数 58戸 総農家数 30戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 3戸 1種兼業農家 6戸 2種兼業農家 6戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 1,272ha 耕地面積 45ha 田 3ha 畑 43ha 耕地率 3.5% 農家一戸当たり耕地面積 1.5ha

以上という過疎・高齢化が進行する地域内には病院や学校などはなく、最も近い生活関連施設まで車で約20分程度を要することから地域全体で声を掛け合い、お互い助け合いながら生活を営んでいる。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 開拓事業が形成した「連帯感」

大野地区は、桜島と大隅半島が陸続きになった大正3年の桜島噴火により家や田畑を失い、移住を強いられた旧垂水村、旧西桜島村の出身者と昭和21年の桜島噴火や戦後の引き上げ者等が開拓事業により切り開いた地域である。

徒歩以外の交通手段を持たない開拓時代、垂水市中心部から片道3～4時間を要し、正に陸の孤島であった大野での開拓事業は、想像を絶する苦難の連続で、市販の鋤では役に立たないほどの原生林の開墾作業に始まり、住む家の建築、道路の整備、水や食料の確保、小学校の建設などゼロからのスタートであった。

農業や生活、教育など全ての面において、個人の力での解決は難しく、地域全体で取り組むことが不可欠であったため、開拓時代当初に自治組織を設立し、何事も地域みんなで話し合い、助け合って進める連帯感が醸成された。

イ 歯止めがかからない人口流出

開拓当初から世代を超えて受け継がれている「助け合い」、「連帯感」の精神を活かし、昭和56～58年には鹿児島県の農村振興運動に取り組み、平成7年には新・農村振興運動の重点地区として話し合い活動を基本に公民館や多目的広場の設置、連絡道路の開通など、地区を取り巻く環境は徐々に整備され、むらづくり活動が活発に展開された。

一方、高度経済成長時代以降、住民の多くが都市部に仕事を求め、人口流出による過疎化が進行し、大野小中学校の生徒数は、昭和35年の185人をピークに減少に転じた。児童減少を何とか食い止めようと「孫返し」や「農村留学」などの策を講じたが、平成17年には生徒数9人となり、平成18年3月、開拓と共に歩んできた大野小中学校は、91年の歴史に幕を下ろした。

ウ 30年ぶりに復活した青年部が新しい考えを取り込む

学校を中心として成り立っていたコミュニティ機能は、独居老人の増加、住民同士の交流の減少などにより脆弱化が進んだ。変容するふるさとの姿を目の当たりにした農業後継者等が、大野の魅力を発掘・発信し、I・Uターン者による人口増で大野を再生し、昔の賑わいを取り戻したいと平成22年、約30年ぶりに青年部を復活させた。

この青年部による発案により、伝統芸能の継承活動や地域資源の発掘・活用、農産物のブランド化、PRイベントなどの活動の展開に結びついた。

エ 「大野はこうありたい」～10年後を見据えた地域再生計画～

青年部の発足と同じ頃、垂水市では、各地区（旧小学校区）の地域振興計画策定が始まり、大野では、他地区に先駆けて10年後に向けた計画策定に取り組んだ。

青年部等を中心としたワークショップや全住民へのアンケート調査などから、10年後は83人という地区の人口推計結果となったことに危機感を覚え、大野地区に必要なのは「人」であること、「人」を増やすための取組が必要であることを改めて認識した。

「わたしたちは大野の人を増やしたい（住む人、来る人）」という目標を掲げ、地域資源のPRや交流活動の拡大、新たな特産品の開発など「10年後のありたい姿」を実現するため「だれが」、「いつ」、「どのように」すべきかを住民みんなで2年7ヶ月かけて検討し、「大野づくり計画」を平成23年3月に策定した。

また、計画作成から4年が経過した平成27年3月には、計画の検証を行い、計画の見直しを行った。

第2図 大野づくり計画



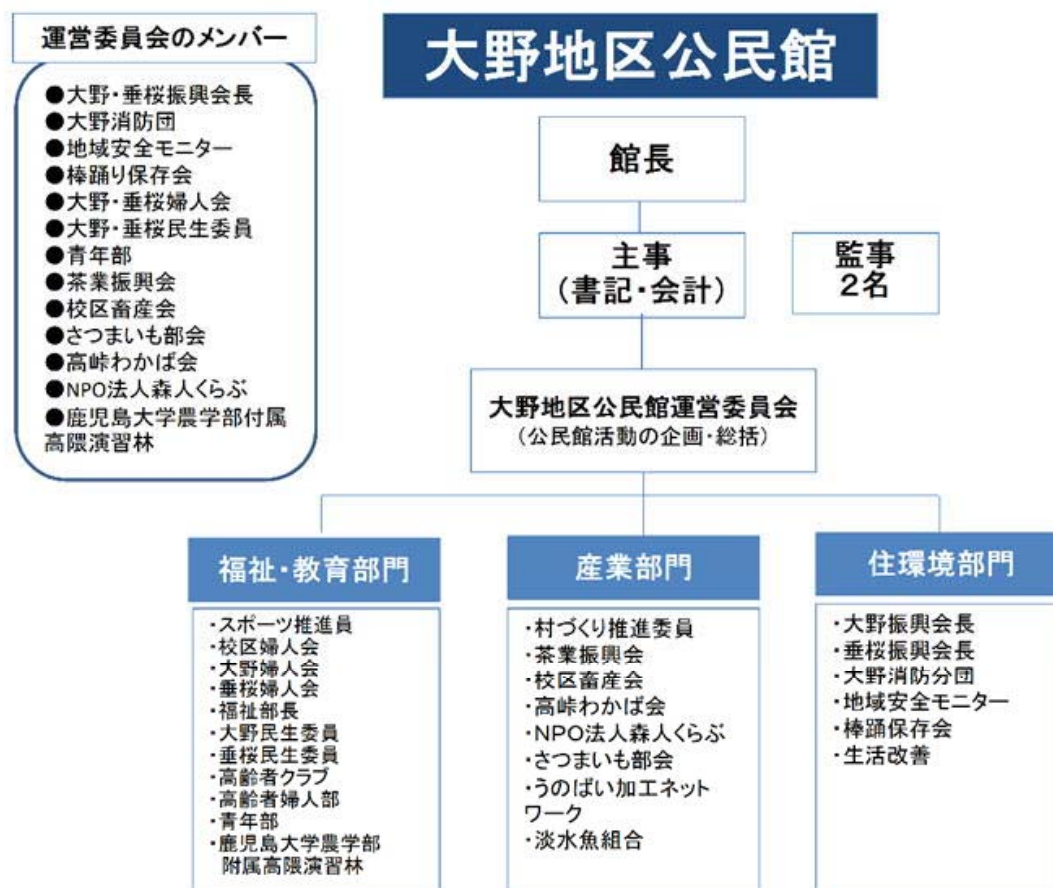
左が平成23年3月初版、右が平成27年3月改訂版

(2) むらづくりの推進体制

大野地区公民館は、地域活動全体を企画する運営委員会と福祉・教育、産業、住環境の3部門から構成され、各部門に鹿児島大学農学部高隈演習林、NPO法人森人くらぶなどの地域内の活動団体を公民館の部会に取り入れ、「大野づくり計画」の実現に向け、地域資源を生かしたPRや交流活動、商品開発などに取り組んでいる。

また、大野地区公民館は、垂水市、鹿児島大学との協働で「大野ESD自然学校」を開設し、森林環境教育活動に取り組んでいる。

「住民全員が主役」のむらづくり体制



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

住民の強い想いを結集して作った「大野づくり計画」の実現に向けて、大野地区公民館を中心にむらづくり活動に取り組んでいる。

「つらさげ芋」などの地域資源の発掘やPR活動、大学生など若者との交流人口の拡大により人を増やすための取組と若者や女性の能力を活かした取組を地域活動に取り入れ、集落機能の維持・発展、地域全体での所得確保を図っている。

2. 農林業生産面における特徴

(1) 標高550mを活かした開拓農業と林業の両立による後継者確保

活火山桜島からわずか10km圏内に位置する大野地区では、降灰による農産物への被害を受けながらも、昭和40～50年代に生産基盤を整備し、生産方式の近代化を図るとともに、夏場の冷涼な気候をいかし、他産地より1ヶ月早く出荷できる秋インゲンやキヌサヤエンドウの栽培など、高台の立地をいかした農業を営んでいる。

一方、100年の営みに支えられた貴重な森林資源を有する大野地区では、育林、伐採による木材生産やしいたけ、木炭、シキミなどの特用林産物の生産など林業も盛んな地域である。

これらの林業と農業との組み合わせにより所得を確保することで、茶や畜産、さつまいもなど作物毎に核となる後継者が育成され、世代交代が円滑に進んでいる。

(2) 地域ぐるみの保全活動による農地のフル活用

中山間地域である大野地区では、近年イノシシによる被害が深刻であり、収穫直前の作物が全滅するなど生産意欲の減退、耕作放棄地も増加傾向にあった。そこで、地域住民による話し合いを重ね、県営事業等を活用し、住民総出の施工により侵入防止柵を地域全体に設置し、地域全体で保全管理に取り組んでいる。

地区内の耕地のほとんどは、規模拡大を指向する農家への集積、高齢農家や兼業農家との連携による農作業受委託など、お互いに協力しながら限られた農地をフルに活用している。

(3) むらづくりビジネスによる農業振興

大野地区の地域振興の目玉として目をつけたのは、自家消費用として子どもの頃から当たり前のように食べ、甘いとは思っていたが販売するまでの意識がなかった「つらさげ芋」であった。

大野地区では、厳しい自然環境の中、開拓当初からさつまいもを生産しており、収穫したさつまいもを初霜までの約1ヶ月間、寒風に当てると甘みが増すことを体験的に知った先人から、各家庭の軒先に蔓から吊り下げた「つらさげ芋」を保存食として代々受け継いできた。

普通のさつまいもにしか見えない「つらさげ芋」が本当に売れるのか、「つらさげ芋」で人が呼べるのかなどの不安を抱えながらも取組をスタートさせた。

ア 「つらさげ芋」で大野に人を呼び込む

平成22年、地域に人を呼び込むため「つらさげ芋」をメインとした手作りのイベント「大野原いきいき祭り」を企画した。

住民の予想を遙かに上回る800人の来場者が訪れたこの「大野原いきいき祭り」は、その後、毎年約1,500人の来場者で賑わい、直売所などの販売拠点を持たない大野地区にとって、農産物販売により農家の収入機会が確保されるなど地域全体の経済を潤すとともに、住民の絆やつな



写真1 つらさげ芋の販売

がり、地域の良さを改めて見直す機会となっている。

イ 「つらさげ芋」のブランド化による農業振興

「大野原いきいき祭り」の開催を契機に、スイーツ並みの甘さをもつ「つらさげ芋」は様々なメディアに取り上げられ、予想以上の反響があった。これに自信をもった住民は、「大野地区さつまいも部会」を設立し、地域全体でさつまいもの生産拡大に取り組んだ。

平成25年度には、「つらさげ芋」の地域共同の干し場を整備し、統一した管理作業により均一的な品質の生産が可能となった。

また、販売期間や数量が限定される「つらさげ芋」に続くブランドとして、つらさげ芋と同程度の品質をもつ「熟成芋」のブランド化に取り組むとともに、貯蔵庫も併せて整備した。これにより糖度を増す上で欠かせない温湿度の管理が効率的にでき、長期間の販売ができるようになった。

さらに、「つらさげ芋」は1ヶ月以上の吊り下げ、「熟成芋」は3ヶ月以上の貯蔵で焼き芋の糖度が35度以上という統一基準を設定し、大野原ブランドとして販売している。

「つらさげ芋」、「熟成芋」のブランド化による需要の拡大で、生産量が増加し、植付、収穫、回収作業などをNPO法人森人くらぶや地域の高齢者が担うなど、持続的に生産できる体制を構築している。

平成27年度には、公民館内に焼き芋機を導入し、さらに付加価値をつけて販売する体制を整えている。

これらの取組により、さつまいもの作付面積は、平成22年の1.0haから平成28年には6.2haに拡大するとともに、付加価値を高め、販売単価は通常約3倍に当たる500円/kgの単価を実現するなど地域全体の所得向上につながっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 若者の活力を取り入れた伝統芸能の継承

地区の結束を図るため大羽重神社に奉納している棒踊りは、踊りの担い手を地区在住者に限定しては、維持できない状況にあった。

そこで、大野地区公民館では、地区内で活動する大学生やボランティアサークルなどの関係者に積極的に呼びかけ、棒踊り保存会の指導により踊りの担い手として育成し、伝統芸能を円滑に継承している。

さらに、高齢者の指導による棒踊りに必要な草鞋づくり体験、大学祭での棒踊り披露など、若者を取り込むことにより



写真2 棒踊りの奉納

新たな取組が展開されている。

(2) 若者の定住による地域再生

これらの交流活動を通じて大野地区に魅力を感じた大学生は、「大野ESD自然学校」で活動していた学生ボランティアサークルを「NPO法人森人くらぶ」として法人化した。

NPO法人森人くらぶは、大野地区公民館と協働で「つらさげ芋」、「熟成芋」の生産や加工、かつて盛んに行われていた「炭焼き」の復活、大野散策フットパスや軒先カフェ、子供たちを対象にした環境教育活動など、大野地区の住民が気づかない資源を引き出し、過疎地でも若者が定住して、生計が成り立つようなソーシャルビジネス活動を行っている。

これらの取組をきっかけにNPO法人森人くらぶの関係者や芸術家など人口の8%に当たる10人の若者が平成22年以降にI・Uターンしている。伝統芸能継承や大野原いきいき祭り、大野づくり計画策定委員などの地域参画を通して、若者の視点から様々なアイデアを提案し、住民の約半数が高齢者という大野地区に活気をもたらしている。

元来、「ヨソ者」を受け入れる開拓地という地域性ではあるが、取組当初は移住者に対し不安視する意見もあった。しかし、先人が苦勞して創り上げた地域を自分たちの代で衰退させてはならないという強い思いが、地域ぐるみで空き家を改修し、移住者を受け入れ、新しい仕組みを構築する住民の行動として表れている。



写真3 住民による空き家改修

(3) 女性のアイデアを活かした地域内6次産業化

平成20年に女性8人で結成した加工グループ「高峠わかば会」は、「つらさげ芋」を利用したスイーツや総菜などの加工・販売に取り組んでいる。

また、公民館でのイベントや視察受入の際は、加工品の販売や郷土料理の提供を行うなど、地区内の経済活性化に貢献している。



写真4 女性グループによる開発

このような地域の6次産業化を担う「高峠わかば会」の活動に刺激を受けた子育て中の若手女性たちは「自分たちも得意分野を活かして地域に貢献したい」と近隣地区に居住する地区出身者にも呼びかけ、平成27年「大野原加工ネットワーク」を設立した。

「大野原加工ネットワーク」は、「高峠わかば会」と連携・協働し、学

校跡地のプールで養殖するニジマスを使った燻製づくりなどの商品開発や販路拡大など若手女性のアイデアを活かした新たな活動に取り組んでいる。

さらに、「高峠わかば会」、「大野原加工ネットワーク」は、公民館の運営委員として地域活動に参画するなど、一労働力として開拓農業を支え続けてきた大野の女性が自分の経営から一步踏み出し、能力を発揮することで規模は小さいながらも所得を得、自己実現につながっている。

(4) 地域ぐるみでの生活環境整備

「自分たちでできることは何でもする」開拓者精神のもと、孟宗竹のパイプをつないだ水道施設、大羽重神社の建設や補修作業、高峠つつじヶ岡公園の環境整備など、課題が上がるとその都度地域で集まり、自ら生活環境を整備している。

また、Iターン者等の受入れに際しては、住民総出で空き家を改修し、移住後は地域ぐるみの交流を図るなど、住民だけでなく移住者にとっても、「ここに住んで良かった」、「ここで暮らしたい」と実感のできるむらづくりを行っている。